

氏名(本籍)	とやま 外山	さぶ 三	ろう 郎	(鹿児島県)
学位の種類	文学博士			
学位記番号	博乙第222号			
学位授与年月日	昭和59年11月30日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
審査研究科	歴史・人類学研究科			
学位論文題目	日露海戦史の研究 —戦記的考察を中心として—			
主査	筑波大学教授	芳賀	登	
副査	筑波大学教授	臼井	勝美	
副査	筑波大学教授	文学博士	野口	鐵郎
副査	筑波大学助教授	文学博士	大濱	徹也
副査	筑波大学助教授	岩崎	宏之	
副査	筑波大学助教授	安藤	正士	

論文の要旨

本論文は400字詰原稿用紙3000枚余におよぶ長編である。著者は「戦記的考察」と副題し、日露海戦史の包括的な歴史叙述を基盤とした戦記的考察に基づく試論を構想した。そのため本論文の構成は、はしがき、序論と第一編「戦争準備に関する考察」、第二編「戦記の考察」、第三編「補足的事項に関する考察」となっている。

はしがきでは、世界の戦史関係の学界において、はじめて利用する『極秘明治37・8年海戦史』（以下『極秘』と略）全12部150冊の位置づけを試み、それによって戦記的考察を加えようという意図をもつに至った点を公刊『明治37・8年海戦史』（『公刊海戦史』と略）その他の資料批判とかかわらせて述べている。また第三編は、さらに考察すべきものが多かったにも拘らず、経理財政面、医務衛生面・技術面等、とそれぞれに、より専門的考察を必要とするために概括的な紹介にとどめざるを得なかった点にふれている。

序論では第一章「日露戦争全史の中における日露海戦史の位置」において、日本が対露戦にふみ切った軍事的成算にふれると共に、日本海海戦が戦争を終結に導いた役割を評価する。そして第二章で「本研究の目的とその必要性」にふれ、『公刊海戦史』の問題点を指摘した上、露国海軍軍令部の『露日海戦史』と日本の海軍軍令部の編纂した『極秘』の史書を駆使しての日本海海戦史のかきかえの必要性が力説される。その直接理由は『極秘』が一部しかない稀覯本であること、ロス

トーフ編『ソ連から見た日露戦争』（昭和55年初版）が出版されたことによる。それをふまえて本論文は、(1)伝記類(2)陸戦史関係(3)露国側の出版物(4)その他の外国での日露海戦史研究に資する著書論文を参考にして日露海戦史の合理的検討を意図している。第三章では海軍軍令部編『極秘』および露国海軍軍令部編『1904・5年露日海戦史』を扱い、とくに前者の構成および内容・史料的価値・関与した人々を分析し、後者の概要・内容を紹介している。第四章では海戦史のあり方と日露海戦史の編纂の意義を追求し、太平洋戦争下の戦史理解の無智を反省した上で、戦史の再構成を考えたいと企図したものである。

第一編第一章「日本海軍の戦争準備」では三国干渉と海上権への反省をふまえ、「臥薪嘗胆」下の海軍大拡張も山本構想でおしすすめた点とその具体化の過程を明らかにし、装備の近代化を明確化したものである。その上で日本におけるマハン研究と日本海軍兵学の形成過程を秋山真之・佐藤鉄太郎を中心に追求した。また対露諜報及び沿岸地誌調査と海軍の戦争準備の仕上げ、東郷の連合艦隊司令長官任命、海軍先行の陸海軍協議、開戦の時機の決定、海軍軍令部の独立などを明らかにする。第二章「北清事変と日英同盟」では北清事変にともなう海軍派遣の中での東郷の活躍、そして露国海軍恐れる必要なしとの心証をつかんだことなどにふれる。加えて日英同盟と日本海軍の戦争準備過程にも言及している。第三章では「露国海軍側の戦争準備」を露国側の資料を中心に叙述し、極東露国海軍戦備の問題点を摘出し、極東総督府設置とアレクセエフ総督就任、戦争準備の促進、対日戦争計画、戦略研究、作戦命令書等にふれ、準備不足の状況を指摘している。

第二編は本論文の中心部分である。第一章の「緒戦」、第二章の「露国旅順艦隊に対する海上作戦」では急襲・閉塞・封鎖と黄海海戦、第三章の「陸軍との協同作戦と露国旅順艦隊の全滅」ではその過程と旅順要塞開城への過程が日時を追って捉え直される。第四章は「露国浦塩分遣艦隊に対する作戦」を詳細にあきらかにし、上村第二艦隊の行動、浦塩艦隊の行動、蔚山沖海戦にふれる。ここでは第二章は日露の史料をよく対比してつかい、第三章は日本側の史料を中心に、第四章は『極秘』によって叙述され、その随所に従来の戦史にみられないような詳細な作戦史料が紹介されている。

第五章「日本海海戦」は、(1)露国増遣艦隊に対する日本海軍の作戦準備を、大本営の対応、朝鮮海峡に対する行動、北海方面の警備、南洋巡視と巡察などから考察し、(2)露国増遣艦隊東航始末を『露日海戦史』によって、その全航跡を追求し、かつその編制と朝鮮海峡突破計画をたてた理由から長官の資質にまで言及している。その部分はロシアの史料によるもので、ロジェストウェンスキー査問会議の史料まで及んでいる。その上で五月二十七日の戦闘、五月二十七日夜の戦闘、五月二十八日の戦闘を具体的に記述する。これらは戦闘概況をのちにまとめて具体的にかいたものを用いてかかっている。その叙述は『露日戦争史』等を引用して日露両海軍の戦力対比と分析、戦闘中の航跡の分析などに主力がおかれ、かつ地図上にそれを図示するなど詳細を極めている。また報告資料なども随所に附録として掲載する。とくに戦術上の研究に基づく確信としての丁字態勢の有効性をはじめ戦績戦果の考察等にも筆が及ぶ。第六章では「日本海海戦後の作戦」について述べ、北遣艦隊のこと樺太北部の占領及び沿海州への作戦等を記したのち、連合艦隊の凱旋・解散について

ふれている。

第三編は主として支援作戦及び支援業務の概要を中心に記述し、そして国際事件とくに国際法的考察に頁がされている。そこでは補獲規定、捕獲審検令、俘虜取扱、ジュネーブ条約および同条約の原則に応用する条約の適用、防禦海面令の制定などに論及している。終章は、日露海戦史が歴史に及ぼした影響と本研究成果の意義にふれている。

戦争目的を朝鮮に対するロシア勢力の排除に限定し、その上に立って軍事的成算が見出せるとしている。日本海海戦は日露戦争中の海戦史の上で、(1)全作戦の基本として、開戦と同時に黄海の制海権を獲得するため開戦劈頭露国旅順艦隊を急襲したこと。(2)陸軍の海上輸送を確得して、その満洲への先制展開を支援したこと。(3)敵撃滅の戦略は分撃を基本とし、その累積効果に立って機をみて決戦を強いるものであったこと。(4)これらの作戦計画の策定において、特に作戦地域の特徴を利用したこと、などに特色と意義があるとし、それと共に奉天の戦と日本海海戦の講和とのかかわりに大きな意義を見出している。さらに、日露海戦は、海軍軍備、戦略に大きな影響を与え、海軍装備を戦艦巨砲（大型口径）中心へとかえさせたこと、その上に日本国防史上において「帝国国防方針」を決めさせ、仮想敵国をアメリカにかえた対米戦略、漸減邀撃艦隊決戦を生み出したと論断している。

審 査 の 要 旨

本論文の意義は以下の諸点にある。(1)海戦史の戦記分野を確立しようと努めたこと。すなわち海戦史の範囲を明確にし、戦記の体系を成立させたこと。(2)『極秘』を利用して事実本位の叙述をしたこと。(3)日本の戦争準備の位置づけをしたこと。(4)露国海軍の実相と戦争準備や極東総督アレクセエフの直接責任を明確にしたこと。(5)マカロフ提督の在任の意義や日本海海戦における露国艦隊の敗因、敵前大回頭の背景把握等。(6)細部にわたって検討がいきとどいていること。また本論文は次の諸点において高い評価を与え得よう。(1)日露海戦史の戦記的考察の包括的研究として両国の一等史料を使用してかいた画期的業績であること。(2)戦争準備を一般的でなく、戦争準備について、戦争計画、戦備充実、作戦方針の確立を含めて精密な考察をしていること。(3)各艦よりの戦闘詳報をもとにして戦争概要をつくる過程を踏まえた考察が部分的に成立して、軍事的な叙述に秀れていること。(4)『極秘』と『公刊海戦史』の比較がなされ、作戦命令などの史料の関連づけも行なわれて、戦記叙述の方法を具体的に検討したものであること。(5)海戦史編纂の構成員及び編纂の意図を綿密に考察した基礎作業であること。(6)日露海軍の戦力的比較の検討、局面局面における具体的経過を明らかにし、動員力、輸送能力その他の比較に秀れていること。(7)海戦史の主な作戦のみでなく陽動作戦その他との関連づけが行なわれ、全体の作戦の上での位置づけがなされていること。

しかし、この論文は著者のいう様に戦記的考察に偏重した嫌いがつよく、日露戦争を時代に位置づける論文としてはいささか弱いものであるが、論文集でないこと、それ故に戦史としては包括的

であること。加えて史料の扱いの上でも『極秘』の批判的とりあげに精粗がありすぎ、他の史料との照合不可能なとき、あまりにもそれに依存しすぎる。陸戦史との関連づけを含めて広義の戦争史としての構想に欠けることなどが、欠点といえなくもない。その意味で歴史的考察としては不十分であるともいえよう。とはいえ、本論文はあくまでも著者の言をかりれば「戦記的考察」であり、いまだ明確でない戦記叙述の努力として評価したいが、評価の対象とするとき、多くの論文を読み、それ自体努力した叙述、工夫した点、『極秘』その他の新資料を発見した点、一義的史料に目を通した実証力の点では評価し得る。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものとみとめる。